

《提題者視座からの当日まとめ》

当日冒頭、法社会学でニクラス・ルーマンを専門とされた福井康太氏のお話から入らせていただきましたが、まず今回のテーマを「学」の「方法」という、方法論研究会かねてのテーマに照らして考えるにつけ、「実在の汲み尽くせ無さ」（リアリズム）ということを中心に、

「わたし」「せかい」「自覚（内観）」「コミュニケーション」「自己創造」といった中で「倫理」「道徳性」「公正」

といったものが立ち現れる場所として、「宗教」性を鍵にするということは、ルーマン的に、コミュニケーションを通じて倫理を考えるという福井氏のスタンスと極めて密接に重なるところであったと、改めて感じています。何処までもコミュニケーションとして（動的な）機能として神あるいは宗教を捉える立場は（プロセスとして神を捉えるホワイトヘッドのような立場もまたそうですが）果たして神とはそういうものなのか、という問いに向けての存在論的プロテクトを（神を捉えているのではなく神の機能を捉えているのだという）単に提供するだけではなく、個々に相違を持ち得る「わたし」たちの「魂」について、その「実在」（汲み尽くせ無さ）および「自由」といったことを通じて、「わたし」たちの（互いに異なり得る種々幸福に向けられた）希求の「豊かさ」とも言える（何処までも動的なる）ものを、合わせて必然的に「困り込む」ものにならざるを得ないと思います（※1）。その際、我々のような「学」の「方法」という問題系に於いては（そこに立場を制限することによって）、神あるいは宗教の機能がそのようなものであるならば「学」の意義は（とりわけ社会全体を含めた「真の」知という意味の下でのそれは）どのようなものであり得る（得ない）のかということを通じて、「学」による「学」のための、いわばその最も外側（神を通じて）の「学」の「倫理」というべきものが、その根源的「方法」という位置に据えられることになると考えられます。これは純粋に論理的な問題として、スキエンティアを通じた、スキエンティアそれ自体の位置付けでありながら、同時に神あるいは宗教性の機能的「豊かさ」を通じて、サピエンティア・プルデンティアにも継がるものになると考えられます。（これが、花岡永子氏から Zoom で頂いたご質問への応答になっておりますでしょうか。また上記 ※1 は、後日入谷純氏からメールで頂戴した、「機能」化された神の疎外というご質問に向けて、何らかの応答となっておればと願っております。）

このように『宗教』性ということを中心に、特に我々の「倫理」の問題、「意識」の問題、「倫理」の問題、「正義＝公正」および「国家」の問題 etc. を総括する上での鍵概念として、今日喫緊の諸問題に対峙させながら、社会科学のための「リアリズム」に基づく根源的な方法という位置（地位）に関わらせていくということを中心に、当面、この先しばらくのテーマにできれば、と思っております。

先の事前資料におきまして、提題者側からは特に今年度までの議論を踏まえた3つの柱（1）学の方法（2）市場とデモクラシーおよび貨幣論・負債論（3）経営と宗教、を統合的に展望する気持ちでの「宗教性」ということを書かせていただきました。シンポジウムを終えて、今一度、これは4月からの次年度に続けば...との気持ちで、改めてこの3点について、メモレベルにて恐縮ながらまとめさせていただきます。（RFSSの**具体性置き間違いの三層**、対象、認識、方法に対応させています。）

(1) 方法と宇宙「せかい」層での宗教性：宗教と科学ということを通じた學の方法の基底を考える。今年度の話題とした「真らしさ」（プラトン・ヴィーコの）という古典的実在論と「わたし」の知というスタンスをベースにしながら、例えばルーマン的には「わたし」たちのコミュニケーションにおいてダブルコンティンジェンシーによる偶発性定式の自己組織化のような、そのようなものを含めたコミュニケーションと倫理。あるいはホワイトヘッドの神と宇宙論、量子力学的世界観と集团的意識、京都学派あるいは華嚴思想、西田・田辺・西谷哲学などを踏まえた宇宙論も含めて（※2）。

(2) 正義と国家「理性」の層での宗教性：国家の役割（重要性）ということ、を、「わたし」および「せかい」との関連を踏まえた正義・公正ということを通じて純粹理論の俎上に。その折「わたし」と国家（中間組織）の間にもコミュニティ的な相互関係を明確にする必要（それが民主主義）がある。国家の信用（貨幣）とリバタリアン（わたし）を均衡させるところのとしての「市場」（資本における「上から」の働きを「制御」する）という考え方。バタイユ普遍経済、モースの贈与などとの関係も。

(3) 「わたし」と現実社会の層での宗教性：経営と宗教（経営は宗教であり宗教は経営である）ということ。あるいは宗教と民族、国家、ナショナリズムとグローバリズムの関係を豊かに捉える（価値判断の元としての宗教性）ということ。RFSS 的にはこの層における「わたし」と現実社会（娑婆界）から「せかい」の層に与える円環（螺旋）構造が重視される。企業倫理 CSR といったものが集団「意識」として形成される問題は、この層から理性の層に直接的に働きかけるというよりも、方法と宇宙の層（場）を通じたものと考えられる（そうでなければ単なる儲け主義と分類される）。松下の「根源の社」住友家の家訓などは、そうしたものがこの層での宗教性として表出したものと分類されるのではないか。

※2：パーソンズには、ここで「方法」という上からの一方向的な価値の発動の嫌いがあり、ルーマンの仕事はそれに対する1つの応答であったと考えられる。また、西田はそもそも「学の根底に宗教がなければならない（善の研究）」という立場である。

今回シンポジウムは我々の研究会では「宗教性」という問題に向けてのその第一歩ですが、上述のような議論のその裾野にひとつの契機を作ることにおいてまあそれなりのスタートが切れたのではないかという印象です。夏頃に向けて、当該方向に向けての一層深い議論に入っていくことができたらと、そのような気持ちであります。

浦井 憲 （2025.3.24.）